

メキシコの口語スペイン語 にみられる冗語の“le”について

——特に ándale を中心に——

佐 藤 惣 平

目 次

- 1 はじめに
- 2 冗語“le”に関するいくつかの問題点
 - 2, 1 冗語“le”の付く語とその地理的使用分布
 - 2, 2 ándale に関する問題点
 - 2, 3 ándale の“le”は enclitic pronoun と言えるか
- 3 メキシコの口語スペイン語にみられる冗語の“le”
 - 3, 1 動詞に付く冗語の“le”と動詞以外の語に付く冗語の“le”
 - 3, 2 動詞（命令形）に付く冗語の“le”
 - 3, 3 andar VS. その他の“le”の付く語
- 4 ándale を中心に
 - 4, 1 andar と“le”の文法的結び付き
 - 4, 2 anda と ándale の相違点
 - 4, 3 ándale の意味的広がりについて
- 5 まとめ

1 はじめに

メキシコのスペイン語は、スペイン本国のスペイン語（以下、標準スペイン語と呼ぶ）と比較して、音声、語彙、形態、文法など色々な面で相違が認められる⁽¹⁾。本稿では、その中で、メキシコの口語スペイン語で頻繁に間投詞に接尾する冗語⁽²⁾の“le”に焦点を当てて、その形態上の特徴を検討し

てみたい。

標準スペイン語で通常*i Anda!*, *i Upa!*などと表現される間投詞がメキシコでは*i Ándale!*, *i Úpale!*などのように語尾に“le”が付いた表現が日常の会話で頻繁に聞かれる。これらの表現では、特定の指示物を示さない与格人称代名詞“le”が命令形(動詞から転用した間投詞)及び本来の間投詞などの語尾に付いているものと考えられる。従って、この“le”は文法上何の意味も持っていないので、無駄な語、つまり、冗語とすることができる。(以下、この“le”を冗語の“le”と呼ぶ)

ところで、この冗語の“le”は、文法上の意味を持たないが、メキシコではその用法において何らかの重要な意味あいを含んでいるのではないかと考えられる。筆者の知る限りでは、すでにメキシコにおける人称代名詞“le”の特殊用法としてこの種の“le”が我が国でも報告されているが⁽³⁾、本稿では、この冗語の“le”をさらに詳しく細かく分析し、それにかかわる問題を検証してみたい。特に(1)冗語“le”の有無で意味あいがどのように異なっているのかという問題、(2)標準スペイン語の間投詞*i anda!*とメキシコの間投詞*i anda!*の共通点・相違点について、(3) *ándale* はメキシコ的表現と言われるが、その使用頻度はどの程度高いのか、(4) *ándale* は、どのような場面で用いられるかという問題などを中心に考察を進めていきたい。

なお、本稿では、冗語の“le”が付く語を調査するために、Oscar Lewisの3冊の作品:(1) *Pedro Martínez*⁽⁴⁾ (以下、Pedroと略す)、(2) *Antropología de la Pobreza*⁽⁵⁾ (以下、Antr.と略す)、(3) *Los hijos de Sánchez*⁽⁶⁾ (以下、Los hijosと略す)を選んだ。そして、これらの作品の中で用いられている冗語“le”の付く語及び文を調査・分析し、その結果を採用した。また、筆者自身が在墨中⁽⁷⁾、冗語“le”に関して気付いた事柄も参考にした。

2 冗語の“le”に関するいくつかの問題点

2, 1 冗語“le”の付く語とその地理的使用分布

寺崎⁽⁸⁾は、冗語“le”がメキシコでは頻繁に使用されると報告している。特定の指示物を示さない冗語の“le”が動詞に接尾した表現として、*¡Ándale!*, *¡Déjale!*, *¡Córrele!*, *¡Súbanle!*, *¿Qué húbole?*を例に上げて、冗語“le”が動詞に付く場合は命令形が多く、特に *tú* や *usted* に対する命令形に付くと指摘している。また、動詞以外の語に付く表現として、*¡Híjole!*, *¡Hólale!*を例に上げ、これらは、間投詞として固定化した表現で、この場合にはもはや“le”を与格の代名詞と言うことはできないと説明している。さらに、彼は、冗語の“le”の有無で基本的な意味は変わらないが、冗語“le”が付く場合は婉曲や強調の意味あいを付加し、この“le”は複数形“les”になることはないと述べている。

ところで、本稿では、これらの記述に関するいくつかの問題点、例えば、冗語“le”の付く語は、他にどのような例があり、その使用頻度はどのようになっているか、また、冗語“le”が特に *tú* や *usted* に対する命令形に付くと指摘しているが、*vosotros* や *ustedes* に対する命令形に付く頻度はどの程度なのか、また、冗語“le”が複数形“les”になることはないのか。さらには、冗語“le”が婉曲、強調の意味あいを付加すると述べているがこの説明は正しいと言えるかなどといった諸々の問題について検証を試みてみたい。

さて、この冗語の“le”がメキシコではよく用いられることが認められるが、メキシコだけの特殊な表現なのであろうか。A Malaret⁽⁹⁾によれば、“*ánde*le”という表現は、メキシコ、チリ、パナマなどで認められると報告されている。実際に、イスパノ・アメリカ各地域において冗語“le”の付く語彙について詳しく調査すると、その他の国々でもその使用が認められる可能性が非常に高いと推測される⁽¹⁰⁾。

冗語“le”の使用は、メキシコだけの特殊な表現ではなくて、イスパノ・ア

メリカのある国々で共通にみられる特徴の1つと考えることができるように思われる。

2, 2 ándale に関する問題点

寺崎は⁽¹¹⁾、冗語“le”の付く言葉の中で、特に ándale やその丁寧形 ándeलेがメキシコでは非常に頻度が高いことから、メキシコ的表現の1つであると指摘している。しかしながら、その頻度の高さを裏付ける具体的な数字が示されていないので、その使用頻度が他の“le”の付く語と比較しどの程度高いのか調査し具体的な数字を求める必要がある。また、ándale をメキシコ的表現と言う以上は、イスパノ・アメリカの中での ándale の使用状況も合わせて探る必要があるように思われる。さらに、彼は、ándale をそれぞれ使われる場面により、(1)それ行け、さあ、しっかり (相手を励まして行動させる)、(2)その通り、いいぞ (相手の言ったことに同意する)、(3)じゃあ、また。元気で。(人と別れるときに言う)の3つに集約して、その意味的広がりを説明している。しかし、それぞれの場面における具体的な例文もそれらの頻度も示していないので、本稿ではこれらの点も含めて調査を進めたい。

ところで、上野は⁽¹²⁾、メキシコで使われる ándale が標準スペイン語の間投詞 anda と全く同じ表現で、驚き、励まし、奇異、抗議、不信、軽蔑、嘆願などを表わすと説明している。また、メキシコで用いられる anda も ándale と同じで、「さあ、ねえ」を表わすとしている。しかし、標準スペイン語の間投詞 anda がメキシコで使われている anda や ándale と全く等しいと言うことができるであろうか。また、メキシコで用いられる間投詞 anda と ándale の間には全く違いがないと言えるであろうか。これらの問題も後で詳しく取り扱いたい。

また、岸は、ándale が特に頻繁に使用されることに着目し、これを冗語“le”の付く語の中でメキシコ的表現の核と考える。そして、この ándale の

“le”が他の命令形や間投詞などに影響を与え、i pásale!, i híjole!などの表現が生まれたと主張している⁽¹³⁾。筆者も彼と同様に、メキシコでは ándale という間投詞表現が定着し、他の間投詞表現に影響を与えたのではないかと推論に強い興味を持っている。しかしながら、この冗語“le”が他の間投詞凡てに付くことはなく、ある限られた特定の語にのみ影響を与えているように思われるので、なぜ特定の語に影響を与えるのかという点を考えてみる必要がある。また、なぜ、どのようにしてi ándale!がメキシコ的表現として定着していったのか推理する必要があるように思われる。

2, 3 ándale の“le”は enclitic pronoun と言えるか

ándale の“le”を enclitic pronoun (強調代名詞) であるとする興味深い記述がみられる。E.Kany は、アメリカ・スペイン語の中で頻繁に用いられる no más (nomás) の用法の説明の中で、no más が命令形の後に付く場合、強調を表わす接尾辞のように動詞をきわ立てる働きをすることを指摘している⁽¹⁴⁾。このような表現は南アメリカで多く、中央アメリカ、アンティリヤス諸島でやや少ないが、メキシコでは稀で、no más と同じ意味あいでは“le”が付くことがあるとして次のように説明している。

“In Mexico, *no más* is seldom used with imperatives in the foregoing sense. It is common there, however, with certain verbs (like *mirar*, *parecer*, etc.) to connote surprise or admiration: “mire *no más* = *mire usted qué cosa* ‘just imagine! just think of it!’ As will be remembered, the enclitic pronoun *le* added to command forms often imparts the same feeling in Mexico as *no más* in the River Plate region, Chile, Bolivia, Peru, and Ecuador: *ánde le* = *vaya no más* = standard *vaya usted*; *pá se le* = *pase no más* = standard *pase usted*, etc.”⁽¹⁵⁾

つまり、メキシコ以外のイスパノ・アメリカの国々では、no más が命

令形の後に付く表現が一般的であるのに対し、メキシコでは、“mire no más”など no más が命令形の後に付く表現の他に、“ándale”, “pásele”など no más ではなくて“le”が命令形の後に付き no más と同じ働きをする表現があると指摘している。

彼は、この問題の“le”を意味のない無駄な人称代名詞の冗語と考えないで、動詞を強調する意味あいを付加する enclitic pronoun (強調代名詞) として考えている。つまり、メキシコでは、ándale や córrele などの“le”が“no más”と同じような感じで用いられるので、no más の驚きや感嘆の強調的意味あいから“le”を強調代名詞と呼んでいるように思われる。しかし、この“le”が“no más”と全く同じものであると考え、動詞を強調すると考えることができるであろうか。この点をさらに詳しく検証していきたい。

ところで、彼のこの指摘で、“ándeale”がイスパノ・アメリカの国々の中でメキシコだけで特に多いという一面が窺える。従って、“ándale”という表現が、メキシコ国内での頻度を調べる必要はあるが、一応、他の国々に比べ頻度が高いという意味でメキシコ的表現であると認めることができるように思われる。

3 メキシコ・口語スペイン語にみられる冗語の“le”

Oscar Lewis の3つの作品で冗語“le”の付く語を調査した。それぞれの使用頻度を各作品ごとで集計すると次のようになった。

(I) Pedro Martínez⁽¹⁶⁾

ándale(116), ándeale(41), újule(14), córrele(11), pásale(10), pásele(6), ándenle(3), firmele(3), párale(2), jálele(2), pícale(2), échele(1), apúrale(1), pégale(1), éntrenle(1)

(II) Antropología de la Pobreza⁽¹⁷⁾

ándale(63), córrele(7), ándeale(5), híjole(4), échale(2), ándenles(1), síguele(1), ayúdale(1), órale(1)

(III) Los hijos de Sánchez⁽¹⁸⁾

ándale(48), Quihúbole(10), ándele(5), órale(5), pásenle(3),
 éntrale(3), híjole(3), ponle(2), píntele(2), grítale(2), ándenle(1),
 síguele(1), levántele(1), tómale(1), córtale(1), háblale(1), cór-
 ranle(1), jálenle(1), éntrenle(1)

冗語の“le”の付く語を注意深く見てみると動詞に付くものと動詞以外の語に付くものとは大きく2つに分けられる。動詞に付く場合は、“Quihúbole”一例を除けば凡て動詞の命令形の後に付き、動詞以外の語に付く場合は、間投詞の後に付いていることが認められる。

3, 1 動詞に付く冗語の“le”と動詞以外の語に付く冗語の“le”

冗語“le”の付く語を動詞に付くものと動詞以外の語に付くものに焦点を当てて分類し、それらを頻度数の多い順に整理すると次のようになった。

| 動詞 (命令形) + “le” | | | 動詞以外の語 + “le” (間接詞) |
|--------------------|------------|--------------|------------------------|
| andar (284) | parar (2) | apurar (1) | újule (14) |
| pasar (19) | seguir (2) | tomar (1) | híjole (7) |
| correr (19) | pintar (2) | cortar (1) | órale (6) |
| entrar (5) | picar (2) | ayudar (1) | |
| echar (3) | poner (2) | levantar (1) | |
| firmar (3) | gritar (2) | hablar (1) | |
| jalar (3) | pegar (1) | | |
| 〔例外：Quihúbole(10)〕 | | | |

まず、動詞に付く“le”と動詞以外の語(間投詞)に付く“le”の割合を調べてみると、冗語“le”の付く語全体(392例)の中で動詞に付く“le”は365例で93.1%、一方、動詞以外の語に付く“le”は27例で6.9%となる。これから明らかかなように、動詞に付く“le”が約93%に対し、動詞以外の語に付く“le”がわずか7%と圧倒的に冗語の“le”が動詞に付くことが多いことがわかる。

ところで、ここで動詞に付く“le”の中で先に例外的に取り扱った“Quihúbole”について説明してみたい。寺崎によれば、“Quihúbole”は、“¿Qué húbole? (=¿qué hay? ¿Qué tal? 発音は通常 [kjúbole])”と説明されている⁽¹⁹⁾。筆者も寺崎と同じように、“Quihúbole”とは“¿Qué hubo?”なる文の動詞部分“hubo”の後に冗語“le”が付いたものと考えているが、“Quihubo”や“Quihúbole”といった表現は、普通の文としてよりも語としての感じが非常に強い固定化した特殊な文表現であるように思われる。“Quihúbole”が冗語“le”の付く動詞全体の中で占める割合を調べてみると2.7%とその割合が極めて低いことが認められる。しかし、使用頻度が10例と他の頻度の少ない多くの語に比べ目立った存在であることが窺える。“Quihúbole”は特殊な例ではあるが、冗語“le”の付く語の中では注目すべき表現であるように思われる。

さて、次に動詞以外の語、つまり間投詞に“le”が付いているものについて少し説明をしておきたい。iújule!は、疲れ、ため息などを表わす間投詞iuf!⁽²⁰⁾に冗語“le”が付きiúfule!からiújule!なる表現が出てきたものと推測される。ihijole!は、驚きを表わす間投詞ihijo!⁽²¹⁾に冗語“le”が付いたもので、ióra!は、今すぐ、早くなどの意味を表わす間投詞iora!⁽²²⁾に“le”が付いたものと思われる。なお、筆者のメキシコ滞在の経験では、先に説明したihijole!が特に日常会話の中で頻繁に使用されているように思われる。また、今回の調査においては確認することができなかったが、物を持ち上げる時の掛け声などに用いられるiupa!(iaúpa!)に冗語“le”の付いたiúpale!という表現をよく耳にしたのでここに書き留めておきたい。

3, 2 動詞（命令形）に付く冗語の“le”

冗語“le”の付く語全体の中で、命令形の後に冗語“le”の付く割合が90.6%と使用頻度が非常に高いことがわかったので、ここで冗語“le”の付く動詞（命令形）に焦点を当てて各動詞がどのような割合で使用されているか調べて

みることにしたい。

《冗語“le”の付く動詞（命令形）の使用頻度》

| | | | |
|------------|-----------|------------|--|
| 80% | 5% | 5% | 10% |
| andar(284) | pasar(19) | correr(19) | entrar, echar jalar, parar seguir, etc. (33) |

この帯グラフから、全体の80%を動詞 andar 1語が占めていることがわかる。次に、pasar と correr が各5.35%づつ、2つの動詞で全体の約10%強を占めている。andar が動詞命令形の中で最も重要で中心的な動詞であることは明白であるが、この andar に pasar と correr を加えた3語が主なる冗語“le”の付く動詞と考えることができるように思われる。そして、残りの10%弱の部分をもとの動詞郡が占めているが、これらを詳しく調べてみると entrar (5例) 1.41%, echar, firmar, jalar (各3例) 各0.85%, parar, seguir, pintar, picar, poner, gritar (各2例) 各0.56%, pegar, apurar, tomar, cortar, ayudar, levantar, hablar (各1例) 各0.28%と10%弱の中に17種類の動詞が入っていることが認められる。ところで、これら17種類の動詞以外の動詞も日常会話では、冗語“le”の付くものがあると予測されるが、頻度の方はやはり非常に少ないと思われる。

ここで、冗語“le”の付く可能性のある動詞を予測してみると、中心になる動詞 andar, pasar, correr が主に動きを表わす動詞であることから、その他の動詞も seguir, echar, parar, entrar など動きを表現する動詞が多くなるのではないかと推測される。しかしながら、pintar, gritar など一般の動作を表わす動詞も含まれているので一既に動きを表わす動詞と決めつけることはできないように思われる。

さて、以上は、使用頻度の観点から動詞を調べた訳であるが、今度はそ

の動詞の命令形を人称と数に焦点を当てて分類し、それぞれの頻度を調査してみたい。

次の表は、“le”の付く中心的動詞 andar, pasar, correr の集計結果と“le”の付く動詞全体の集計結果である。

| 《andar》 | | 《pasar》 | | 《correr》 | |
|----------|-----|----------|----|-----------|----|
| ándale | 227 | pásale | 10 | córrele | 18 |
| ándeles | 51 | páseles | 6 | córrales | 0 |
| ándenle | 4 | pásenle | 3 | córranle | 1 |
| ándenles | 2 | pásenles | 0 | córranles | 0 |

《動詞全体（20種）の集計》

| | | |
|-------------------------|-----|-------|
| tú に対する命令形 + “le” | 276 | 77.7% |
| usted に対する命令形 + “le” | 66 | 18.6% |
| ustedes に対する命令形 + “le” | 11 | 3.1% |
| ustedes に対する命令形 + “les” | 2 | 0.6% |

これらの表から、冗語“le”が命令形に付く場合 2 人称単数形 tú に対する命令形に付くものが一番多いことがわかる。その頻度は動詞全体の集計で 77.7% と非常に高く、冗語“le”の付く命令形の中で中心になっていることが窺える。tú に対する命令形に次いで頻度の高いのが 3 人称単数 usted に対する命令形である。その頻度も 18.6% と比較的多く先の tú に対する命令形の 77.7% と合わせると約 96% となり、冗語“le”の付く命令形の大部分は tú に対する命令形と usted に対する命令形と考えることができる。先に寺崎が冗語“le”が tú に対する命令形と usted に対する命令形に付くと報告している⁽²³⁾のはこの 96% という数字で理解できるように思われる。複数形の命令形に冗語“le”が付く例として“súbanle”が寺崎によって報告されているが⁽²⁴⁾,

今回の調査で *ándenle* (4例), *pásenle* (3例), *córranle* (1例), *éntrenle* (2例), *jálenle* (1例) の合計11例が認められた。これらは頻度こそ全体の3.1%と少ないものの話し相手が複数の場合、冗語“le”が複数形の命令形に付くことが確認できる。これらの例文の内4例を参考のために記載しておきたい。

(1) *Ándenle* pues, agarren sus trincheras. (Pedro, 87)

(2) Ahora *éntrenle* ya. (Pedro, 237)

(3) Pos ora, *pásenle*, *pásenle*. (Los hijos, 394)

(4) *Córranle*, compadres. (Los hijos, 395)

また、寺崎は冗語“le”は複数形“les”になることはないと報告している⁽²⁵⁾が、冗語“les”と思われる表現“*ándenles*”を2例見つけた。

(5) *Ándenles*, coman juntos para que se quieran más (Pedro, 399)

(6) *Ándenles*, muchachos, Su padre ya va a salir del baño (Antr., 264)

これらは頻度にして0.6%と極めて少ないが、冗語の“les”も存在することが認められる。ただし、その使用が非常に稀であるので冗語“les”として耳にすることがほとんど無いものと思われる。

ところで、複数形の命令形でも3人称複数形 *ustedes* に対する命令形だけしか認められないのは、メキシコでは2人称複数形の人称代名詞 *vosotros* が存在しないで、*tú* の複数形が *ustedes* になることに原因があると考えられる⁽²⁶⁾。

3, 3 andar VS. その他の“le”の付く語

冗語“le”の付く動詞 *andar* の占める割合が冗語“le”の付く語全体の中で約72%、また、動詞の命令形の中で80%と、その使用頻度が非常に高いことが明らかになった。ここで、*andar* に冗語“le”の付く割合を正確に知るため

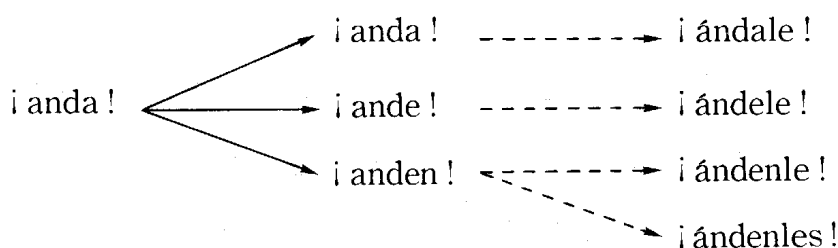
に、andar の命令形(間投詞的表現)で冗語“le”の付かない場合の頻度と比較してみたい。

冗語“le”の付かない例を調べてみると、“anda”27例，“ande”3例，“anden”1例の合計31例が認められた。“le”の付く284例と“le”の付かない31例の割合はそれぞれ90.2%と9.8%で、比で考えると約9対1となる。このことから、動詞 andar に冗語“le”が付く表現がメキシコでは圧倒的に多く全く定着した表現になっていることが認められる。

ところで、これを裏返して考えてみると andar 以外の語で冗語“le”の付く語は、頻度からみても定着した表現、固定化した表現としては考えにくく、偶発的要素がかなり強いのではないかと思われる。つまり、“ándale”、“ándeale”という表現が普及・定着し、固定化した表現に近付き、この冗語“le”がその他の命令形の表現や間投詞に影響を与え、一部の動詞命令形や間投詞に冗語“le”が付く表現がみられるようになったのではないかと推測される。ところで、この推理を説明するために重要な要素を思い起こさなければならない。それは、“ándale”とか“ándeale”といった表現が動詞命令形として命令の意味で機能しているよりも間投詞としての意味あいが非常に強いということである。だから、間投詞的意味あいの強い命令表現や一部の間投詞に影響を与えることができたのではないかと思われる。また、このように考えると、なぜ凡ての命令形に影響を与えず、ただ一部の動詞に限定されるかということや、なぜ間投詞に“le”が付く表現が生まれてきたかということが説明できるように思われる。

さて、それでは次になぜ andar の命令形に冗語“le”が付く表現が定着していったのかという点を考えてみたい。まず、形態上の変遷過程を次のように推理することができる。

《変遷過程》



第一段階で、間投詞*¡anda!*から*¡anda!*, *¡ande!*, *¡anden!*への変化が起こってきたものと思われる。動詞命令形から間投詞に転用した*¡mira!*, *¡toma!*, *¡vaya!*, *¡viva!*など⁽²⁷⁾の中には、*tú*に対する命令形 *usted* に対する命令形からの転用があり、これが混乱の原因であるように思われる。つまり、間投詞*¡anda!*が動詞 *andar* の命令形からの転用でできたものという意識が働いて変化が起きたのではないかと推測される。この段階では間投詞として固定化した表現に定着していなくて、まだ命令文的要素の強い表現であったものと思われる。次に、第二段階でそれぞれに冗語“*le*”が付く表現が起ってきたと思われるが、これは間投詞*¡anda!*が話し相手により、*¡anda!*, *¡ande!*, *¡anden!*と変化を伴うようになり命令的要素の強い間投詞表現になったために、命令形の後に付く与格人称代名詞“*le*”が間違って付き、*¡ándale!*, *¡ándele!*, *¡ándenle!*という表現が生まれたものと思われる。この間違いの起こる可能性がなぜ起こるか次の例によって考えてみよう。

- (7) { a. *¡Ándale, grítale a tu papá.* (Los hijos, 460)
 b. *¡Grítale, cabrón!……Grítale, mano, no te dé miedo.* (Los hijos, 369)
- (8) { a. *No, primero háblenle a la muchacha.* (Pedro, 36)
 b. *Tú, háblale, Felipe……* (Pedro, 385)
 c. *¿Por qué no está tu mamá? ¡Háblale!* (Antr., 242)

(7)－aの文中の与格人称代名詞“*le*”は具体的に“*a tu papá*”を指示することがわかるが、(7)－bの文中の“*Grítale*”の“*le*”は漠然として何を指示して

いるのかわからなくなっている。また、(8)― a の文中の“le”も“a la muchacha”を指示することが明確にわかるが、(8)― b の文中の“le”では文脈がなくなると、“le”が何を指しているのか少しぼやける。そして、(8)― C の文になると“le”が具体的に何を指しているのかわからなくなる。このように見てくると具体的に指示物を示すはずの与格人称代名詞も状況によって具体性が欠けてきて意味もなく冗語的に使用されることが起こっていくものと推測される。“ándale”, “ándeles”の表現も同様にこのように混乱の中で出てきたものと思われる。

ところで最後に、i ándenles!の“les”に関して説明を付け加えたい。元来、andar に付いたこの与格人称代名詞“le”は、間違いから使用するようになったものなので何を指示しているのか明確でなく、命令形が複数形ならば“le”も複数になるのではないかという類推が働いて、i ándenles!という表現を使うケースも出てきたのではないかと思われる。

4 ándale を中心に

4, 1 andar と“le”の文法的結び付き

ここで動詞 andar 1 語に限定し、冗語“le”とのかかわりを調べてみたい。

| andar | | | andar + “le” | | |
|-------|------|------|--------------|-------|-------|
| anda | (27) | 8.6% | ándale | (227) | 72.1% |
| ande | (3) | 0.9% | ándeles | (51) | 16.2% |
| anden | (1) | 0.3% | ándenle | (4) | 1.3% |
| | | | ándenles | (2) | 0.6% |

先に andar に“le”の付く場合と付かない場合の割合が約 9 対 1 であることを述べたが、この表で各々の使用頻度が全体の中でどのような割合を占めているか見てみよう。まず ándale の頻度が 72.1% と非常に高く、ándeles (16.2

%)と *anda* (8.6%) がそれに続くが、これら 3 語で全体の96.9%とほとんど凡てを占めていることがわかる。残り3.1%を *ándenle* (1.3%), *ande* (0.9%), *ándenles* (0.6%), *anden* (0.3%) の 4 語が占めているわけであるが、これらの使用は非常に稀で、日常会話で全く耳にする機会に巡り合わないほどその使用頻度が低いことが窺える。

ここで、使用頻度の高い順にそれぞれを並べてみると、*ándale* > *ánde* > *anda* > *ándenle* > *ande* > *ándenles* > *anden* となり、複数形よりも単数形、三人称の命令形よりも二人称の命令形、また冗語“le”の付かないものよりも“le”の付く方がそれぞれ頻度が高くなる傾向があるように思われる。

ところで、動詞 *andar* のグループの中で、*ándale* が *ánde*, *anda* などその他の語と比較し使用頻度が非常に高いことが確認できたが、ここで、なぜ *ándale* がこれほど迄に頻度が高いのかその原因を探ってみたい。文法通り、話し相手との間柄、親しさにより二人称命令形か三人称命令形かが決まり、また、話し相手が一人か複数かにより単数形か複数形かが決まるのであれば、先にあげた数字ほど *ándale* とその他の語の頻度の隔たりはないのではないかと思われる。会話の中の文章であるから、当然二人称の活用が多いことは予測されるが、何か他の原因も考えられるように思われる。その手掛かりとして次の例文を参考にしよう。

(9) *Usted váyase, ándale, váyase, váyase.* (Pedro, 129)

(10) *Pues, ándale, váyanse, yo los encamino.* (Pedro, 95)

(11) *les dice a los Herrera:—Ándale que al regidor le están pegando.* (Pedro, 127)

(12) *Ándale, vámonos……Pos Ándale, vamos a tomar.* (Pedro, 229)

(13) *El capataz nos grita:—Ánde*le, arriba. (Pedro, 65)

(14) *—Ánde*le, muchachos. (Pedro, 239)

(15) *…y ya les digo:“anden, junté tanto; ánde*le, vayan a traer

para tomar mientras trabajamos, *ándale*. (Pedro, 112)

例文(9)~(12)では“*ándale*”が三人称単数命令形及び複数命令形の代わりとして使用されている。また、(13), (14)では“*ánde*”が複数命令形の代わりとして用いられている。さらに例文(15)では、三人称複数命令形 *anden* が三人称単数命令形 *ánde* に代わり、この *ánde* が二人称単数命令形 *ándale* に代わっている。

これらの例文でも、複数形は単数形の方に、三人称命令形は二人称命令形の方に、また、“*le*”の付かないものは“*le*”の付く方に代わる傾向が窺え、先に述べたことを裏付けているように思われる。また、この事は、*ándale* が他の代わりに使われ、使用頻度の非常に高い二人称命令形がさらに多くなるという理由を説明しているように思われる。ところで、なぜこの *ándale* が他の代わりをするなどその使用頻度が高いのかその理由を推測してみると、これは *ándale* が元来固定的な表現の間投詞 *¡anda!* の代わりとして使用されるようになったということに原因があるように思われる。つまり、もともと固定的な表現が基盤になっているので、話し相手が誰であろうと、また、複数の相手であろうと変化させないで *ándale* のままでよいとする意識が話者の根底で働いているものと思われる。

4, 2 *anda* と *ándale* の相違点

先に、メキシコでは間投詞“*anda*”が“*ándale*”という表現に変化したと述べたが、もし両者が全く同じ意味のままで変化し使用されているのなら“*anda*”という表現は必要なくなり凡て“*ándale*”に変化するのではないかと思われる。しかし、いぜんとして両方の表現が存在する以上、両者の間には何らかの意味で相違点があるように思われる。幾つかの例文を参考にこの点を考えてみよう。

- (16) { a. *¡Ándale, vete!* (Pedro, 19)
 b. *Anda, vete,...* (Antr., 272)

- (17) { a. *Ándale*, hijo, cena. (Pedro, 22)
 b. *Anda*, nena, come, … (Antr., 290)
- (18) { a. *Ándale*, dale de comer. (Pedro, 335)
 b. *Anda*, dale las gracias. (Antr, 291)
- (19) { a. *Ándale*, no seas mala. (Antr, 296)
 b. *Anda*, no seas codo, … (Antr, 265)

(16)~(19)各組の例文 a と b は、“*ándale*”を用いた文と“*anda*”を用いた文で両方がほぼ同じか、または類似する文を選んだものである。各組の a と b の例文を比較してみても、Kany⁽²⁸⁾が指摘しているように *ándale* の方が *anda* よりも強調の意味あいが強いようには筆者には到底考えられないのである。なぜなら、これらの例文の“*ándale*”, “*anda*”は両者共、「さあ、……」と話し相手の行為を励ます時に用いられるもので、その表現自体が相手の注意を促す役割を果たし強調の意味あいの強いものであることを考慮に入れなければならないし、また、同時にこれらの表現が元来口語表現上の特徴なので、どのように発音されるかという発音上の問題も含めて考慮しなければ両者の強弱は計れないのではないかと思われる。例えば、“*ándale*”を用いた表現でもそれが強く発音されることもあるし、弱く優しく発音される場合もある。また、“*anda*”の表現でも同様のことが考えられる。その時、弱く優しく発音される“*ándale*”と激しく強い口調で発音される“*anda*”では、どちらの表現に強調が感じられるであろうか。先の基準通り簡単に決められないと考える方が無理がないように思われる。従って、“*ándale*”が“*anda*”の強調表現としてだけ働いていると考えないで、強調を表わす場合もあれば、強調を表わさない場合もあると考える方が妥当であるように思われる。ところで、“*ándale*”が強調だけを表わす表現でないとするれば、先に寺崎⁽²⁹⁾が指摘している婉曲表現であろうか。確かに“*ándale*”が弱い調子で優しく発音される時などは“*anda*”の強い語感が和らげられ親しみの情調が添えられるように感じられるが、これも、“*le*”が直接婉曲の意味あいを添えている

と考えるよりも何か他の要素・発音などにその原因があるように考えられる。つまり、この“le”に相矛盾するような強調とか婉曲の意味あいを付加する働きがあると考えることに無理があるように思われる。それでは、“ándale”の“le”をどのように考えていけばよいのであろうか。それは“le”だけを特別に取り上げないで、“le”だけを切り離さないで“ándale”そのまま捉えた方が本質に迫ることができるのではないかと思われる。“ándale”という表現はメキシコでは“anda”の一般的な日常的な親しみのある表現として定着していったもので、本来“anda”と“ándale”両者の間には意味的な差がない表現として使われているものが二次的な要因、例えば発音上の強弱や両者の音節上の差、さらに“ándale”の方がより俗っぽい親しみのある表現である等々の要因によって両者の間に意味的な違いがあるかのように捉えられているのではないかと思われる。“anda”と“ándale”に意味的な違いがないとしたら両者の存在理由は意味的な違いからではなく、両者の音節上の差、“anda（2音節）”と“ándale（3音節）”，つまり、リズムの差から生まれてくる表現上の変化にあるのではないかと思われる。次の例文を参考にしてそれらが生み出す表現の多様性を調べてみたい。

- (20) { a. Ándale, anda…… (Pedro, 22)
 b. Ándale, ándale…… (Los hijos, 163)
- (21) { a. …anda vete, córrele. (Pedro, 326)
 b. Córrele, vete, ándale. (Pedro, 41)
 c. Ándale, ándale, vete, pues. (Pedro, 61)

(20)組は“anda”，“ándale”が2度続けて表現されている例であるが、これだけでも表現の上で“anda”や“ándale”が1回だけ使用される場合より変化が生まれ表情が豊かに感じられる。また、(21)組は命令文“vete”を中心に“anda”，“ándale”が付いた例文を集めてみたが、同じ意味内容の命令文も表現が非常に変化に富んでいることがわかる。このように見えてくると、“anda”や“ándale”が表現上いかに多様な変化を与えているかが認められるように思われる。

きて、ここではなぜこの“le”の付いた“ándale”の表現の方がメキシコで広く一般に定着したのかを探ってみたい。メキシコでは縮少辞が頻繁に使用される傾向が認められるが⁽³⁰⁾、この“le”も縮少辞と同様の意識が働き“anda”に接尾辞的に付き定着したのではないかと思われる。náhuatl(ナワトル語)には縮少辞を多く用いる傾向がある⁽³¹⁾と言われているが、その影響も少なからずあるのではないかと思われる。

4, 3 ándale の意味的広がりについて

メキシコの口語スペイン語に用いられる間投詞 ¡anda! と冗語の付いた ¡ándale! には、具体的な意味の差が認められないことを見てきたが、ここで標準スペイン語の間投詞 ¡anda! と比較し、両者の意味上の相違を明確にした上で、メキシコの間投詞 ¡ándale! の意味的広がりについて検討を加えたい。

まず辞書で両者の違いを調べてみよう。標準スペイン語の間投詞 ¡anda! は、Diccionario de Uso del Español⁽³²⁾やその他の辞書⁽³³⁾で次のように説明されている。(I)驚き：¡Anda, si estás tú aquí!, ¡Anda, qué caro! (II)失望：¡Anda, esta película ya la había visto! (III)励まし：¡Anda, déjame en paz!, ¡anda, niño! (IV)軽蔑：Me han puesto mejor nota que a ti… ¡anda! (V)同意：Déjame ir contigo…… ¡anda! 標準スペイン語では ¡anda! が「驚き」を中心にして、「失望」・「励まし」・「軽蔑」・「同意」など色々と異った感情を表わしていることが認められる。

これに対し、メキシコ・スペイン語の間投詞 ¡ándale! は少し異なっていることがわかる。Diccionario de Mejianismos⁽³⁴⁾によれば、¡Ándele! が“fr. fam. que se usa para animar a que se haga alguna cosa”と説明されている。また、その他の辞書など⁽³⁵⁾でも同様に、人が何かをするのを励ます時に使われると説明されている。

以下、例文と調査結果を参考にしてこの点を確認めると共に、メキシコの間投詞*¡ándale!*の意味的広がりを調べていきたい。

| 順 | 形 式 | 頻度数 | 順 | 形 式 | 頻度数 |
|-------|---------------------|-----|--------|---------------------------|-----|
| (A-1) | Ándale, 命令文 | 82 | (A-7) | Vamos, ándale | 2 |
| (A-2) | Ándale, (呼格), 命令文 | 14 | (A-8) | Ándale, vamos, ándale | 1 |
| (A-3) | 命令文, ándale | 11 | (A-9) | Ándale, 副詞, 命令文 | 1 |
| (A-4) | Ándale, vamos | 10 | (A-10) | Ándale, (呼格), 否定命令文 | 1 |
| (A-5) | Ándale, 否定命令文 | 5 | (A-11) | Ándale, (呼格), 否定命令文, 肯定命令 | 1 |
| (A-6) | Ándale, vamos a 不定詞 | 3 | (A-12) | Ándale, (呼格), 否定命令文, 理由 | 1 |

まず、頻度の高い *ándale* と命令文の組み合わせから整理してみよう。

一番頻度の多い文 (A-1) は、“*¡Ándale, vete!*” (Pedro, 19) など *Ándale* の後に命令文を伴うもので82例もあり、*ándale* と命令文の組み合わせの中心になっていることがわかる。その次に多い (A-2) や (A-3) の文、また (A-9) の文などは、(A-1) の文と同じ種類の文で、これらは、相手を励まして行動させる文章と考えることができる。(A-5),

(A-10) の *ándale* の後に否定命令を伴う文もこのグループに入るが、これらは頻度が非常に少ないように思われる。次に、(A-4), (A-6),

(A-7), (A-8) の文は、話者も含めて「さあ、……しょう」という表現で、これらも、うながし・せき立てを表わしていることが認められる。

ところで、(A-11) や (A-12) の文は非常に頻度が低いが、これは *ándale* 以下の要素では焦点のある部分以外は省略されることの方が多くなるためだと推測される。

次に *ándale* が命令文以外の要素と結びつく組み合わせに関して整理してみよう。

| 順 | 形 式 | 頻度数 | 順 | 形 式 | 頻度数 |
|-------|---------------------|-----|--------|------------------------|-----|
| (B-1) | Ándale, 肯定文 | 36 | (B-6) | Ándale, 副詞(句) | 9 |
| (B-2) | (Pos) ándale (pues) | 22 | (B-7) | 肯定文, ándale | 4 |
| (B-3) | Ándale, (呼格) | 20 | (B-8) | Ándale, (呼格), 肯定文 | 3 |
| (B-4) | Ándale | 17 | (B-9) | Ándale, 疑問文 | 3 |
| (B-5) | Ándale, que (理由) | 16 | (B-10) | Ándale, (呼格), que (理由) | 2 |

この中では、(B-1)の *Ándale* の後に肯定文が続く文、例えば、“*Ándale, ahí viene tu suegra*” (Pedro, 40), “*Ándale, ya viene Moreno aquí.*” (Pedro, 73) など、「さあ、……しますよ」という表現が36例と非常に多いことが認められる。(B-7)や(B-8)の文も、これと同種類の文で相手をうながす表現になっている。

(B-2)と(B-4)は、*Ándale* 以外の要素が省略されたもので、両者共頻繁な使用が認められる。(B-2)の使用される状況は、うながし・せき立て・励ましの場合が大部分であるが、一部は単に相手をうながす表現と考えられない例文もみうけられる。例えば、“*Ya nomás un ratito. Nomás esperamos hasta la una. —Bueno, pos ándale pues.*” (Pedro, 264) など、相手の言ったことに対して同意・是認を表わす場合なども認められる。また、“*Ándale*”のみの(B-4)は、“*Y tú, ¡ite comes lo que le toca a él! ¡Ándale!*” (Autr, 236) など調査した例文の範囲では凡て「さあ！」とせき立て・励ましの表現であることが認められるが、筆者のメキシコ滞在経験では、*¡Ándale!*が動作を起こす時に励ましとして使われる場面以外に、時々、すでに動作を起こしその動作の継続中に使用される場面があったように記憶している。これは、相手を励まして「いいぞ」・「頑張れ」などといった感じで使われているものと思われる。次に、*Ándale* 以下の要素で何かに焦点が置かれ他の部分が省略されている表現に

ついて調べてみよう。まず、(B-3)の *Ándale* の後に呼格が続く表現では、“*i Ándale, mamá Pita!*” (Antro, 249) など調査した20例凡てが相手をうながしせき立てる表現であることが認められる。*Ándale* の後に *que* (*porque*) 以下、文章が続く (B-5), (B-11) に関しては、合計18例中15例が“*Ándale, ándale que ahí viene el Presidente de la República*” (Pedro, 244) など、「さあ、……だから」と理由を説明しつつ相手をうながす文章で、残り3例が“*Ándale pues, que te vaya bien*” (Pedro, 395) など、人と別れる状況で使われたもので「じゃあ (それじゃ)、……」という表現と考えられる。さらに、*Ándale* の後に副詞 (句) が続く (B-6), (B-10) の文は“*Ándale pronto*” (Pedro, 33) など凡て「さあ、……」と相手をうながしせき立てる表現であることが認められる。

最後に、(B-9)の *Ándale* の後に疑問文が続く文について調べてみたい。ここで使用されている *ándale* は、相手に対し「さあ、……」と積極的なうながしを表わしていないように思われる。例えば、“*Ándale, ¿no quiere un anisito?*” (Pedro, 259), “*Ándale, ¿quieres ir?*” (Antro, 107) のように *ándale* が「ねえ、(ですか)」と消極的なうながしになり軽く相手の気を引く働きをしているように思われる。

ここで、*Ándale* の意味的広がりについて整理してみよう。調査した例文264例の中で、*ándale* が「さあ、……」と積極的なうながし・せき立て・励ましの表現に使われているケースが254例と全体の約96%に相当することがわかった。また、その他の用法として、相手に対する消極的なうながし・是認・同意などが認められたが、それらの使用に関しては、凡て合わせて約4%と非常に少ないことが認められた。

従って、メキシコで用いられる *ándale* は大部分が「さあ、……」と相手をうながし励ます表現で使用されており、驚きを中心に励まし・軽蔑など様々な意味あいを表わす標準スペイン語の間投詞 *i anda!* と比較し、明らか

に用法上幾らかの相違点があることが認められるように思われる。

5. ま と め

以上の考察から次のように各問題を整理することができるように思われる。

- (1) 冗語“le”の有無でどのような意味の相違があるのか？この問題に関しては、基本的な意味の違いはないと考える方が妥当であると思われる。冗語の“le”がその起源においては、「強調」とか「婉曲」とかの意味あいを付加していたと推測することも可能であるが、現在では冗語“le”の付く*i ándale!*の方が冗語“le”の付かない*i anda!*よりも定着しより親しみのある表現となって、意味の違いのないものとなっているように思われる。また、両者の存在は、その組み合わせとか使用上の変化により表現上多くの効果を生み出す働きをしているように考えられる。
- (2) 標準スペイン語の間投詞*i anda!*とメキシコ・スペイン語の間投詞*i anda!*の間には、どのような相違点があるのか？ 標準スペイン語では、「驚き」を中心にして「失望」、「励まし」、「軽蔑」、「同意」などと様々な感情を表わすのに対し、メキシコ・スペイン語では、ごく一部の「是認」、「同意」の用法を除きほとんど凡てが「うながし」、「せきたて」、「励まし」の表現で使用されており、両者の間には明らかに用法上の相違点があると言いうことができるように思われる。
- (3) *i ándale!*や*i ándele!*はメキシコ的表現であると言えるか？ まず、メキシコとメキシコ以外のイスマノアメリカの国々に焦点を当てて*i ándele!*という表現を調べてみると、メキシコ以外にチリ、パナマなどでその使用が認められるので、メキシコだけの特殊な表現とは言えないが、他の国々と比較し非常に頻繁にメキシコでその使用が認められるので対外的な観点からメキシコ的な表現と考えることができるように思われる。さらに、メキシコ国内だけに焦点を当て*i ándale!*、*i ándele!*の使用頻度を

調べてみても、冗語“le”の付く語全体392例中*i ándale!*が227例で58%、*i ánde!*が51例で13%となり両者で全体の71%を占め、冗語“le”の付く語の中で中心的な表現であることが認められる。従って、*i ándale!*や*i ánde!*はメキシコ的な表現であると言えるように思われる。特に、*i ándale!*は全体の約60%を占め冗語“le”の付く語の中でその中核となっていることが窺える。

- (4) *i ándale!*はどのような場面で、どのような意味あいでも用いられているか？ 組み合わせの上から *ándale* を含む文 (264例) を整理すると次のように分類することができる：(a) *ándale*+命令文〔132例→50%〕、(b) *ándale*〔68例→26%〕、(c) *ándale*+肯定文〔43例→16%〕、(d) *ándale*+理由〔18例→7%〕、(e) *ándale*+疑問文〔3例→1%〕

用法上の観点から全例文を調査し、(a)、(b)、(c)、(d)の中で254の例文が「さあ、……」と相手をうながしたり、せきたてたり、励ましたりする表現で用いられていることがわかった。これらは全体の96%に相当し、これらの用法が中心的なものであると考えられる。他の用法として、相手に対する消極的なうながしを表わすケースが(e)に3例、是認、同意を表わすケースが(b)の中で4例と(d)の中で、人と別れる状況で使われた3例の合計10例が認められた。これらは頻度の上では4%と非常に低いですが、ある特定の状況では、このように「励まし」以外の用法で用いられることがわかった。

ところで、本稿では冗語“le”の研究のために、Oscar Lewis の作品を調査、分析しその結果を採用したが、メキシコ人インフォーマントの日常会話の中から調査して得られた結果も参考にして議論を進める方がより望ましいように思われる。また、本論文に関しては、議論を複雑にしないために、間投詞それ自体に関する問題、及び間投詞と命令形に関する問題について触れないで議論を進めたが、これらの点も含めさらに詳しい研究が必要であるように思われる。

- 注(1)高橋正武『新スペイン語広文典』白水社、昭和50年、p.11
- (2)ここでは、広辞苑（新村出編、岩波書店、昭和42年、第23刷、p.1053）にみられる「むだなことば」、つまり付加的に用いられる不必要な語という意味で冗語という表現を採用した。
- (3)寺崎英樹（「メキシコ・スペイン語の文法的特徴」『HISPANICA』20、昭和51年、p.39）及び岸大介（「メキシコ・スペイン語の代名詞“le”の用法」：第28回イソパニア学会研究口答発表、昭和57年11月20日、於神奈川県大学）を指している。
- (4)Oscar Lewis, *Pedro Martínez* 2^a ed. (México:Litoarte, 1970)
- (5)Oscar Lewis, *Antropología de la Pobreza* 6^aed. (México:Litoarte, 1972)
- (6)Oscar Lewis, *Los hijos de Sánchez* 11^aed. (México:Litoarte, 1972)
- (7)在墨中とは、昭和46年7月から昭和52年1月迄の期間を指している。
- (8)寺崎英樹、前掲書、p.39
- (9)Augusto Malaret, *Diccionario de Americanismos* 2^aed. (San Juan: Venezuela, 1931) p.65 & *Diccionario de Americanismos Tomo I* (Buenos Aires: Academia Argentina de Letras, 1942) p.106
- (10) *A phrase and Sentence dictionary of spoken SPANISH* (New York: Dover Publications, 1958) p.35を参照されたい。
- (11)寺崎英樹、前掲書、p.39
- (12)上野政夫『カストロの家族』芸林書房、昭和56、p.47
- (13)岸大介、前掲研究口答発表
- (14)Charles E. Kany, *American-Spanish Syntax* 2ed. (Chicago: The Univ. of Chicago Press, 1951) p.315
- (15)Idid., p.316
- (16)Oscar Lewis, op. cit.
- (17)Oscar Lewis, op. cit.
- (18)Oscar Lewis, op. cit.
- (19)寺崎英樹、前掲書 p.39
- (20)Emilio M. Martínez A., *Diccionario Gramatical* (Barcelona: Sopena, 1961) p.20
- (21)hijo は、辞書などでは間投詞として説明されていないが、メキシコでは驚きを表わす間投詞表現で用いられる。これは、hijo が名詞から呼格として使用され、さらに間投詞的に用いられるようになったものと思われる。
- (22)ora も hijo 同様、間投詞として説明されていない。しかし、メキシコでは、今すぐとか早くとかを表わす間投詞で用いられている。ora が ahora (今)の頭落語であることに由来すると思われる。

- (23)寺崎英樹, 前掲書, p.39
- (24)前掲書
- (25)前掲書
- (26)前掲書, p.38を参照されたい。
- (27)高橋正武, 前掲書, p.152
- (28)Kany, op. cit., p.316
- (29)寺崎英樹, 前掲書, p.39
- (30)前掲書, p.47を参照されたい
- (31)前掲書
- (32)María Moliner, *Diccionario de Uso del Español* Tomo I (Madrid: Gredos, 1979) p.177
- (33)ここでは, SGEL-Educación, *Gran Diccionario de la Lengua Española* (Madrid: SGEL, 1985)p.110及び Real Academia Española, *Diccionario de la Lengua Española* (Madrid: Espasa-Calpe, 1970) p.85を指している。
- (34)Francisco J. Santamaría, *Dicciosario de Mejicanismos* 2^aed. (México: Porrúa, 1974) p.66
- (35)ここでは, Malaret, op. cit., (1931) & (1942) 及び *A phrase and Sentence dictionary of spoken SPANISH*, op. cit.,を指している。